

シリーズ この人に聞く 第3回

人のことまで意識が届くかどうか国際感覚

— 差別や難民問題から考える人権

タレント/アムネスティ・インターナショナル日本支部特別顧問/NPO法人エファジャパン顧問
イーデス・ハンソンさん

1960年来日し、テレビ・ラジオタレントとして活躍。1986年から1999年までの13年間、世界的な人権擁護団体アムネスティ・インターナショナル日本支部長として活動してきました。また2004年からはNPO法人エファジャパンでベトナム・ラオス・カンボジアの子どもたちへの教育支援活動を実施。なぜ人権を意識するのか、お聞きしました。



想像力の欠如

「私が生まれ育ったインドでは、カーストでえらいめに合っている人や、食べ物が足りない子どもたちが目の前にごろごろしていた。人はどこの国の出身かとか、金髪だったらいいけど皮膚が黒いと下のほうの人間やみたいなことで評価されていた。でも通っていたミッションスクールがすごくいい学校でね、あらゆる国の子どもがいて、自然と国際交流できる環境のなかで育った。」

ところが、そのあと初めて行ったアメリカは黒人問題がひどかった。

「黒人は町で見かけるのに誰も学校へ来ない。学校が別だっというわけ。理由を聞くと、うちらより落ちる人たちやからと、子どもが言う、なんの抵抗もなく。でもインドだったら色は黒くても首相になっているし、医師や教師として尊敬される人はたくさんいる。人権がどうのこうのとかが皆平等とか、そんな勉強もなかったけれど、見ていたらおかしいでしょう。」

そして来日。1960年当時、日本人の生活水準は平均化され、貧富の格差もひどくなかった。

「日本に来て、差別はないからいいなと思っていた。でも、だんだんと気づいた。在日韓国人、朝鮮人の話をすると、どうもなにか言い方や表情が違ってくる。部落問題も全然

知らなかった、目立たない。たとえば人に道を聞くと、そこ通らんほうがええと。そこに住んでいる人たちとうちらは違う、みたいなことを言い出して、はじめて気づく。差別を受けている人はその真ん中にいて生活しているけど、回りは気づかない。それはどこへ行ってもある。」

差別を受け苦しむ人に対して、私たちはどこまで慮ることができるのだろうか。

「人のことを自分と同じように思うか、思わんかという、それが国際感覚なんです。ものすごく単純なことなんだけど、人のことまで意識が届くかどうかという問題。」

「もしも自分が差別されている立場だったら、それはしんどいと思う。世の中の大抵の場合は、いろんなことで線を引き、多くの人はその線の良いほうにいる。でも、それはたまたま。私がすごく優秀でそうなっているわけでもなく、たまたま生まれた時代が良かったから、たまたま親がそういう親だったから。別の国に行ったら反対かもしれない。だから、たまたまということを決まっていいいのかと思う。」

希望する仕事に就くことができ、好きな所へ行き、言いたいことが言え、会いたい人に会える自由。それは余裕だという。皆が当たり前と思うが、それができない人が世界にはまだまだたくさんいる。「当たり前と思うから、そうでない人への想像力が働かない。もし自分がその立場になったら、もう少し考えたらどうやろ」とハンソンさん。

難民の受け入れ

「想像力は日本の政府の人にもないし、政治家にもない。そのへんにあつたら、もう少し違う形で考える方向に動くのじゃないか。」それは、いま世界中の課題となっている紛争地シリアやイラクからの難民受け入れについても当てはまる。各国が次々と受け入れを表明しているなかで、日本のシリア人難民認定は3人のみ(2010年～14年11月申請のうち)。「国民の多くが自分たちと違う人たちは来るなと思っていたら、どうにもならない。日本人は外国へ行くのは好きやねん。